

「わたしと白い病室」

大阪府 安田恵美子

白い病室にはカーテンがない。ただ広い窓からは午後の街が見え、そこから差し込むやわらかな光が部屋全体を包んでいる。

わたしは窓際の椅子に腰かけ、ベッドに横たわる人をずっと見つめていた。その人の腕は、ベッドの傍らの銀色の長い棒から伸びる幾筋もの透明なチューブとつながっている。目はかたく閉じていて、静かな寝息だけが聞こえる。

残された時間があとわずかとわかった時から母は毎日病院に通っているが、大学のあるわたしはなかなか来られない。今日は講義を途中で抜け出してきたのだ。もう少ししたら、母も来る時間だろう。

ベッドの上の人が、ようやくうす目をあけた。

「ああ、きてたんか。いつきたん」

「うん、さっき。寝てたから、起こさなかった」

「ようきたなあ。学校やったんか」

「今日はいつもより早く終わってん」

まばたきの間隔が長い。まだ半分は夢の中のようだ。目をつぶったまま、ゆっくり右手を伸ばしたので、にぎり返した。以前は太りすぎを気にしていたくらいだったのに。癌との闘病生活のせいで大分細くなった彼の手は、つるつるとして冷たい。

「お父さん」

「うん」

わたしの手はあつい。にぎったまましているとその温もりが伝わって、お父さんの手もやがて温かくなってきた。

いつか本当にこの手が冷たくなって、にぎることができなくなる日がくる。けれど、わたしの手は覚え続けるだろう。これからだれかと手をつなぐたびに、思い出すから。この白い病室と、広い窓と、お父さんの大きな手。

どんなに寒い冬の日も、どんなにさびしい時も、手をつなぐとあたたかい。切なくて、泣きそうで、優しく、嬉しくて。この温もりは、いったいなんだろう。人だけが与えられる、この気持ちはなんだろう。

「お父さん。大好きやからね」

目をつぶったまま、うなずいた。頬に涙の筋ができた。わたしの頬と、同じ模様ができた。